

# 「大阪をバリアフリー先進都市にした仕掛け人」

自立センター・ナビ代表 尾上浩二さん (2001.6.8)

**ご紹介:** キャスターつきのスーツケースをひっぱって東京からやってくる大阪のまちが格段に歩きやすいことに気づきます。昨年5月成立した「交通バリアフリー法」も大阪の影響を受けています。その本家、「駅にエレベーターを！福祉の街づくり条例を！大阪府民の会」事務局長など様々な組織の要職をつとめてられる尾上さんがきょうのゲストです。脳性まひでありながら弁舌さわやか、という珍しい方です。午後からはこの大学を電動車いすで点検していただ



## トークから:

15年ぐらい前までは、「大阪はどんべたやないか」「びりっけつや」と言っていました。

大きく変わるきっかけが、大阪府の福祉のまちづくり条例の制定です。1972年、障害者が外出する運動がはじまりました。正式名称は「差別を恐れずその風のように街に出よう」。えらいしゃちほこばって、と思われるかもしれないですけども、この時代車椅子に乗って街に出ていく、そんなことをしたら周りのものに迷惑なんだ、あるいは奇異な目で見られる、そういう意識のバリアとの戦いがありました。

私が学生時代、大阪府の地下鉄というのは、設備もなければ、駅員の対応も非常に悪いとやうことでいろんなトラブルが続いていました。

「兄ちゃん兄ちゃん。兄ちゃんあの、階段あるの分かってるやろ。」「何で介護者4人連れて来えへんねん。」という風に、駅員にくってかかれる。「まわりのお客さんに手伝ってもらうから、なんとかいけるから。」とか言うてやり過ごしていこうと思ったら、「あかんあかん、もしそなんんして怪我してもらったらわしらの責任になるんや。」と言う。「それやったら、駅員さんたちで手伝ってくださいよ。」と言うと、「ちゃう、そなんんわしらの仕事違う。」と言うて、通してくれない。20分ぐらいすったもんだしてやっと乗ることができたというようなことがありました。

そしていよいよ本格的な運動が1976年に起こります。これの一番最後ぐらいに私飛び込んだということになるのですが、「誰でも乗れる地下鉄を作る会」、阪大客員助教授の早瀬昇さんが初代の事務局長です。松葉杖のおっちゃん、牧ロー二さんが代表で、大阪市の交通局と夜中になるまで交渉をつづけました。やっとエレベーターがついたのが1980年に新しくできた喜蓮瓜破駅という駅です。4年かかったということですね。

1988年にリハビリテーションインターナショナルというリハビリテーションの専門家の会議が東京の新宿でございました。北米、アメリカやカナダ、あるいはヨーロッパの一部の国では、「障害者こそが一番の専門家である」と言うことで、障害者である専門家がたくさん参加をしていました。ところが日本ではまだまだそういう状態ではない、障害者はリハビリテーションの「対象者」であり、専門家はそれを提供する側というそういう構図でした。そういうリハビリテーションの国際会議が東京で開かれました。

画期的だったのは、海外から来た障害者と一緒に、300人位が新宿周辺をデモ行進して、

その後運輸省交渉をするために新宿駅を使って山手線で移動したんです。車椅子 150 人ぐらいでいっぺんに乗りましたんでね、駅は大争乱状態。階段を担ぎ上げてもらわないといけないですから、もうパニック状態になった。当時世界一の経済大国と言われていた日本が、実は一皮むけば車椅子で山手線を使おうと思えばどんな様相を呈するのか。そういうことで結構海外の記事にもなったりしました。これがきっかけになって、以降、毎年です。日本各地の障害者団体に呼びかけて、述べ 30 カ所 3 千人が参加するような、誰もが利用できる交通機関を求める全国大行動、という活動が始まりました。

..\*:\*..

小学校 4 年まで養護学校に通った後、ある肢体不自由児施設に入居をした。もう 30 年以上前のことだが、今も忘れられないことがある。毎週水曜日の「回診日」だ。この日をいつも、ビクビクしながら過ごしたものだ。院長を先頭に部長、訓練士等が私たちの部屋に来る。そして、膝や腰を分度器のようなもので量ったりして歩く。「膝の後ろを手術しよう」と言い渡されると、次の週には手術室へ行くことになっていった。今週は、自分の番になるのではないかとハラハラしていたのだ。

施設から外泊で自宅へ帰る度に「障害が重くなつて」帰ってくる私を見て、母は怖くなり、中学校から普通学校に転校させることを決意したという。私たちの入所していた時には、「オ、曜日」が手術日（子供だったのに、「オ、曜日」という「業界用語」で覚えている）だった。手術台が 2 つあったから、毎週 2 人に手術のお鉢が周ってくることになる。事実、私たちの仲間は平均 4、5 回の手術経験がある。そして、一度たりとも、どのような効果があるのか、どのような弊害が考えられるのか等、

### コラム～粘りついた記憶～障害者運動の原体験～

私はもちろん、両親も説明を受けたことは無かった。「期待された効果」が現れず、かえって「障害の重度化」をもたらしたとしても、医者▶の責任が問われた記憶もない。

入所後 3 ヶ月程して、突然、「ポジショニング」という名前の訓練が始まった。腰を伸ばすために、ベッドの上に会議室の机のような板をしかれ、うつぶせになって、腰の辺りをさらしのような布で縛りつけられる。その状態で、晩の 6 時 30 分～翌朝の 6 時まで約 12 時間近く固定された状態で寝続けなければならぬ。子供心に一番つらかったのが、トイレの問題だ。腰のところを縛り上げるので、ちょうど膀胱が圧迫されることになる。我慢することができなくなり、看護婦を呼ぶ。そうすると、しびんを持ってやって来て、「早くしなさい」と命じられる。だが、脳性マヒという障害故、早くしようと頑張れば頑張るほど、かえって出なくなる。また縛られる。そうすると、圧迫されてトイレをしたくなる。それで、またナースコールで呼ぶ。「訓練をしたくないから、うそでトイレと言っているでしょう」とこっぴどく怒られた。「うそじゃない」と心の中でつぶやいたものの、言葉にはならなかった。

この施設での医療体験は、私にとっては一生涯忘れることができない「思い出」、怨念とも言えるほど粘りついた記憶になっている。このことが、原体験になって障害者運動に飛び込んだと言っても過言ではない。

尾上さん・講義当日配布資料より